



『ニホンという病』

養老孟司 名越康文 著

講談社 刊

定価 1,650円 (本体1,500円+税)

本書は解剖医の養老猛司氏と精神科医の名越康文氏との対談本だ。現代ストレス社会でどう健やかに生きればよいか、そして近未来の南海トラフ地震発生後にどうすれば日本社会を維持できるのか、というのが対談の大筋だ。平易な語り口で展開したテーマは、コロナ禍やウクライナ侵攻といった時事から少子化や環境保護などの社会問題、組織と個人の関係、宗教観や死生観、多様性についてなど諸事万般で、両氏の洞察と卓見が新鮮な視座をもたらしてくれる。

日本は明治維新で封建社会から脱却して近代資本主義の扉を開き、アジア・太平洋戦争の悲惨な体験から民主主義思想を立ち上げたが、日本社会の根本には今に至るまで変わらず“合理”ではなく“同調圧力”が存在し、私たちにストレスを与えていると両氏は明察する。その一要因として、英語などの欧州言語とは違って客観性に欠き、主観表現で相手

の合意を得る日本語の独特な構造を指摘した。なるほど、グローバル社会で日本が抱える不安定さは本質的なものなのだと思います。膝を打った。

この国最大の懸念は、2035年後に起きると予測される南海トラフ地震だ。国土交通省などはこの地震を30都府県で32万人が行方不明になり、238万棟の建物が全壊する規模と想定している。両氏は日本がこの災害を生き延びて復興を果たすには「地域的に小さな単位で自給できる構造」にしなければならないと提言し、都市集中から地方分散への視点を持つことを促している。

南海トラフ地震で日本が再び変換期を迎えるとき「この国で初めて、政治とか経済じゃなくて、それぞれの人の生き方が問題になってきますね」との養老氏の言葉が心に響く。多岐にわたる議題を人の心のあり方に主眼を置いて語りあう両氏の言葉が“生の本質とは何か”という普遍的な問いとなって読むものに開かれていくのだ。

(日本農業新聞 齋藤 花)